

ゆがんだ人物像覆す

渡辺利夫著 (藤原書店・2640円)

福澤諭吉を、戦後の日本人の多くは、欧化主義者、文明開化論者、啓蒙思想家として捉えてきた。本書は、そういう福澤像を覆す画期的な試みである。

戦後80年間の日本は、「長い歴史の中でも特異な左翼偏向的なりべラリズムの強い」時代であったのであり、その福澤像は、そういう時代に「造作」されたものに他ならなかった。この「人為的につくられ、そうして閉じられて



しまった」福澤像の権威に逆らうようなことを、日本の近代史や思想史を研究する学者たちはやる勇気がない。このような状況は、福澤諭吉に限ったことではあるまい。

戦後80年に日本人が取り組まなければならぬ重要な仕事は、近代の思想家をはじめ偉人とされる人物たちのゆがめられてきた評価を直すことである。本書は、その魁の役割を果たすに違いない。著者は、福澤が残した文献に虚心に当たって、真実の福澤像に

迫ってみようとしたのである。福澤を「反骨の精神をよくぞ身につけた人物」と評しているが、これは著者自身についても言えることであろう。

福澤思想の深層が読み取れるものは、『丁丑公論』と『瘠我慢之説』である。前者では、西南戦争で新政府に挑んだ西郷隆盛を批判する政府とジャーナリズムを、西郷の「土風」を軽んじるものと難じた。後者は、高位の幕臣であったにもかかわらず、明治新政府の要職に就いた勝海舟と榎本武揚の出処進退を糾弾したものであり、数百年「養い得たる我日本武士の気風」を損なったものだとして批判する。

福澤の「独立自尊」とは、実はこの「土風」「日本武士の気風」に基づいていたのである。一万円札の肖像に福澤の再登場があるならば、本書のカバーに使われている武士時代の福澤にすべきであろう。

では、このような福澤像の真実が、何故、戦後80年に必要なのか。それは、現代の極東アジアの地政学が幕末維新时期に酷似している、「大いなるナシヨナリスト」福澤諭吉の言論が予言的だからである。

評・新保祐司

(文芸批評家)